

人文・社会系



21世紀型のアカデミック・プロフェッション構築過程を国際比較

比治山大学高等教育研究所長・教授 有本 章

【研究の背景】

私たちの研究は、世界と日本のシステムを対象に21世紀型のアカデミック・プロフェッション(Academic Profession、以下APと略します。)の構築過程を比較研究によって明確にすることを目的として実施中のプロジェクトです。

世界のAPは、現在、大学をとりまく環境変化によって、その使命・役割・機能の再構築の課題に直面しています(図1)。社会、政府、知識、大学の間に生じている相互作用によって大学改革が余儀なくされ、大学に所属するAPの理念・構造・機能等が問い直され、新たな専門職像構築の営みがみられます。

【研究の成果】

APのモデルや類型に注目した場合、その典型の一つは、研究と教育の志向に関する類型です。

1992年のカーネギー大学教授職国際調査(世界14カ国)は、経歴、仕事、教育・研究活動、管理運営等を分析しましたが、特に、APのシステム類型として、ドイツ型(独・日等)＝研究志向、アングロサクソン型(英・米等)＝教育・研究志向、ラテン・アメリカ型(ブラジル、チリー等)＝教育志向の3類型が識別されました。これらの比較研究によって、「フンボルト理念」(研究と教育の統一をめざす近代大学の考え方)は、必ずしも実現していないとの実態を解明しました。

今回、私たちは、1992年の調査と同様の質問紙方法で、日本4,600人、米国5,772人など、世界18カ国の教員を対象に調査を実施するとともに、国際セミナー(2008年1月、広島、図2)を開催し、近年の高等教育を取り巻く環境の変化がAPの役割や大学教員の意識・行動にどのように影響したかについての予備的な分析を行いました。

その結果、米国は教育志向に拍車をかけ、英国は研究・教育半々志向を強めたのに対し、日本やドイツは研究志向に執着する傾向が見られました。

世界的に教育改革が進み、ファカルティ・ディベロ

ップメント(FD)などが進行している現在、APも教育志向へ収斂するという仮説が成立しますが、現実には、各国はシステム固有の文化を反映する種々の実態が検証されました。

また、本格的なデータ分析はこれから着手する予定ですが、その他、各国共通の傾向として、博士号取得教員や任期制及びトップダウン型管理運営方式の増加などが見られます。

【今後の展望】

調査結果は、これまでにアイルランドの世界大学改革ワークショップやユネスコの世界科学委員会等で報告し注目を集めました。今後、ASHE(アメリカ高等教育学会)会議(2008年11月)等で報告・検討を行うことにより、世界の各システムのAP研究と照合し、APの現状と課題を更に解明していきたいと考えています。

21世紀がグローバル化や知識基盤社会化を進め、その中核においてAPが研究と教育を中心としたアカデミック・ワークに対する重責を果たすことが一層期待される以上、APの体系的研究は内外の大学や社会発展にとって重要な意義があります。

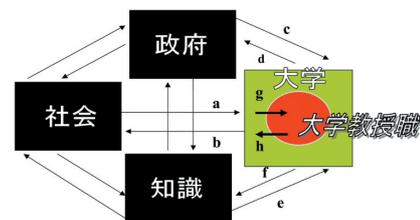


図1 大学教授職の環境変化



図2 『変容する大学教授職—国際比較および実証的視点から—』(2008.1)

【交付した科研費】

平成18-22年度 基盤研究(A)「21世紀型アカデミック・プロフェッション構築の国際比較研究」